

町長の一言



3 車線道路

10年程前に、ドイツを訪問する機会がありました。老人ホームを視察するため、アウトバーンを高速で通過し田舎道を走って行くと、3車線の道路に出ました。これは、

各自自治体とも非常に財政状況が厳しく、公共事業、特に道路整備等予算は、極めて苦しく、需要に応えきれないところであり

村向車線との中央に空白の車線があり、どのような使用の可否と見ていると、直線道路に入ると運転手は、前方の様子を窺いながら中央線に相手が来ないのを確かめると、先行する車を追い越すため、中央車線に出て追い抜いて、すぐにもとの車線に戻りました。村向車線も同じような調子で中央の車線を利用して

パブル時期の予算が潤沢な頃は、橋の欄干に彫刻を施したり、人が通過すると音楽が流れる仕掛けがあったり、擁壁にカラー模様のコンクリートブロックを使用したりした時期もありました。今考えると、その時期にお金の使い方をもう少し工夫すれば、道路整備の延長がもっと伸びたのではないかと思っています。

で、なかなか合理的な考えだなど感じたものでした。間違えば事故故にもつながりかねないので、運転手にあてで聞いてもらうと、ルールをきちんと守れば大丈夫であるとのことでした。

町内の道路をみても、まだ狭小、曲折の箇所が数多く残っています。通過交通量、危険度合などによっても異なると思いますが、人家のある所や畑の中、山の中など地域条件によって、必ずしも一律の道路でなくてもよいような気がしています。

今、国、県はもとより、

文芸しるさと

俳句

目にしみて那處な汗なり働けり

坂 田 男 一

蛇の来て空梅雨真昼外の風呂

山 崎 正 行

橋くぐる水なめらかに花菖蒲

観 測 舟 美 彦

合飲の花雨暮の街の静かなり

高 橋 貞 江

病室の窓に陽が射し夏燕

今 瀬 多 代 美

暖かく茶は喉をゆく旅の宿

坂 村 愛 子

杖の音近くに聞こえ沙羅の花

い 藤 べ き

夏柳水門大きく開きけり

森 幹 江

痛き程大雨粒驟雨来る

仲 田 真 子

混み合へる紫陽花寺に傘忘れ

阿 久 津 あ い 子

葛蒲園茶席の風のやはらかし

坂 村 昭 子

進路案内閉きしままにくらんぼ

竹 内 幸 子

風涼し琴絃の手木手で押へ

田 所 厚 子

青嵐山ふところに友の墓

瀬 谷 博 子

山取りの椎木伸び伸びや山法師

岩 下 金 司

春泥の付きたる壁の息子の靴

はかすかに山の春りふくめり

高 橋 よ し の

「まだ早い」息子の一言に押し

し車止めず帰り来て心に残る

佐 川 あ や

真先に読む海あれば「折々のうた」載る個所へルーベを向くる

杉 山 み ち 子

初どりの野アキもて作れるキャラ

ブきは素朴にて故里の母の味する

宮 本 ふ み 江

水張れる田の面光りて今宵よ

りひと年ぶりの蛙の合唱

所 美 恵 子

たらねの母の芳思に報いざりし

己が「母の日」を子に祝はる

青 柳 京 子

物静かて患者の様子を診てく

れる心安らふ頼もしい紳なり

山 形 式 妙

春の花いつばいに咲く手に生れ

て文殊は春花と名付けられたり

渡 辺 千 紗 子

陽明門とふ名に魅かれ贈いし

紅色の牡丹三十年経し

秋 山 愛 子

ひと束の野路の香り冷宅配

につめて送りの神戸の友に

大 森 久 子

静かなる露立ちこめて緑こく

響える山々朝日差し込む

雷 田 欽 子

現世は梅雨は今そに去り行き

か猛暑に学童疎々しく耐える

仲 田 こ う

朝の庭かぐわしき春り深いて

タイサン木の白き花咲く

鶴 田 す が

紫陽花の白より止りしあきみど

り変り咲きしをしばし眺むる

阿 良 山 ウ メ ノ

あやめ園色とりどりに咲きあふ

れ潮来手漕ぎの船より眺む

岩 下 通 子

田の草を取りて昔を思い出す

苦勞したなど言葉に出せじ

岩 下 美 知 野

炎天下風に吹かれて田舎道

も青々々風の波打つ

市 川 眞 子

十年來の拙き歌はわが歴史と

思いつついま土に老いゆく

薄 井 ひ ろ

ささやかな宴に酔いて迎ぐ空

聖うるうると葉やきて見ゆ

枝 不 美

道きませる恩師を偲ぶ声かど

もくぐもり啼ける雉鳩の声

片 見 和 枝

「ほととぎす」森に啼きゆくを

目の前に見つ夕餉の初燃食む

川 上 千 代 子

雨の日の静はひとときいらさ

むを作るせき春す夏來たるらし

島 愛 子

坐す人を浦島太郎と見間違ふ

半世紀ぶりの旧火に触れ

多 田 志 保 子

夫と吾は共に八十路となりたれ

ば古家もどめて風葉に縁ゆく

坪 井 き よ 子

けだる風に袖き歩みいる我に「こ

んにちは！」と声掛け呉れぬ見が

萩 谷 登 喜 子

見上ぐれば気が速くなるほどま

だ高し足もと見つつ頂目ささむ

和 知 美 智 子

窓一面に海の広がりあかや映む

夕暮るも沖よりフェリー帰港す

雷 田 佐 智 子

あれそれで半ば通じる老夫婦

徳だけと木当の徳に知らぬふり

雷 田 多 蔵

衣食住規則正しくホーム住み

山 木 隆 三 郎

梅雨の晴れ夜の虫達大狂舞

中 島 芳 春

迷い道途に聞かれて回り願

武 北 野

川柳